

令和 6 年 6 月 8 日現在

機関番号：32651

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K19737

研究課題名（和文）COPD及び結核等肺病予防をめざした地域卒煙グループプログラムの開発及び検証

研究課題名（英文）Development of a community group smoking cessation program toward COPD and Tuberculosis prevention

研究代表者

白谷 佳恵（Shiratani, Kae）

東京慈恵会医科大学・医学部・講師

研究者番号：40724943

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、喫煙者へのCOPD・結核等肺病疾患予防及び重症化予防のためのグループ卒煙プログラムの開発であり、専門家へのインタビュー及び呼吸器疾患療養支援（DOTS）を受療する地域結核療養者への自由記述式質問紙調査により、喫煙の習慣化から疾患の発病及び療養の経験、ケアの阻害・促進要因、ケアのアウトカムが記述され、地域療養支援のための示唆が得られた。また習慣的喫煙者における喫煙・生活・心理状況及び身体機能計測の実態調査、予備的卒煙プログラムの実施ならびに実施後グループインタビュー、卒煙介入内容に関する文献検討、習慣的喫煙者へのインタビューにより、卒煙プログラムに必要な要素を確定した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では喫煙の開始から習慣化、慢性症状の出現及び療養、禁煙への試みに関する経験ならびにニーズについて、また慢性疾患を有する者への療養支援に必要な要素について、定量調査、定性調査、文献検討により検討した。習慣的喫煙すなわちニコチン依存の療養は、他の物質異存に伴う症状や慢性疾患の闘病と同義と考えられ、本研究示唆を応用することができ学術的意義を有する。また喫煙による社会経済及び個人のQOL障害期間の侵襲は計り知れず、個人に対する薬理的療法、認知行動療法の研究が進展する中で、喫煙当事者個人のみならず近親者、帰属組織を含めた総合的な視点による示唆が得られた点として、社会的意義も有する。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop a group smoking cessation program for the prevention of COPD, TB, and other lung diseases among smokers. Interviews with experts and an open-ended questionnaire survey of community TB patients receiving respiratory disease treatment support (DOTS) were used to describe the development of the disease from habitual smoking and the experience of treatment, barriers and drivers of care, and outcomes of care. In addition, a survey of smoking, lifestyle, psychological status, and physical functioning measurements among habitual smokers; implementation of a preliminary smoking cessation program and post-implementation group interviews; literature review on smoking cessation intervention content; and interviews with habitual smokers were conducted to determine the elements necessary for a smoking cessation program.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：卒煙 ピアグループ 結核 COPD PRECEDE-PROCEED Model

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

COPD 患者は人口の高齢化に伴い増加、世界における主要な死因に至り対策強化が不可欠であるものの、患者の9割は療養に結びついておらず医療経済的及び患者 QOL 観点からも対策が急務である。また COPD と同様に公衆衛生的対策が重要である結核は、古くから世界の主要死因でありながら罹患率の偏在化によりいまだに制圧されていない。結核は HIV の重感染及び薬剤の耐性化の課題とともに喫煙により罹患しやすく重症化しやすいことが指摘されているものの、喫煙に関する課題解決の検討はほとんど着眼されていない。

喫煙は循環器疾患、呼吸器疾患、がん、うつ等の精神疾患等あらゆる疾患のリスクであるが、依然として喫煙率は高く、健康日本 21 (第二次) において対策を強化すべき健康リスクとして位置づけられ、健康増進法でも受動喫煙の防止が義務づけられている。しかし 30 歳代男性の喫煙率は依然 40% を超え (厚生労働省, 2015) 対策の強化が必要である。

喫煙の持続的な中断が難しい者とは COPD 及び結核等肺病のハイリスク者であると捉えられ、本研究ではこのようなハイリスク者の予防に着眼していく。なお「喫煙を禁じられる」と連想される禁煙に対し、「喫煙を卒業する」という当事者の主体性を重んじることが重要であるため、6 か月以上喫煙行為を行わない状態を卒煙とする。卒煙対策はニコチン代替療法及び心理的依存へのプログラムに関する研究が進む一方で、喫煙を振り返り「卒煙しよう」とする行為への動機づけに関する研究は少なく、実践に活用できるよう蓄積していく必要がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、喫煙者への COPD・結核等肺病疾患予防及び重症化予防のためのグループ卒煙プログラム「卒煙友の会」の開発であり、次の研究 ~ 研究 により段階的に実施した。

1) 研究 (2019 年)

看護師が捉える「COPD 療養者が地域において療養生活を継続していくためのニーズ」を記述し、COPD 療養者における発病から地域療養までの経験を踏まえた地域療養継続のためのニーズ、ならびに地域療養支援への示唆を得ることを目的とした。

2) 研究 (2019 年)

化学療法とともに、包括的で人間的なケアの提供という理念に基づく Directly Observed Treatment、Short-course; DOTS を受療する結核療養者における質問紙調査を行い、地域療養生活の経験に関する自由記載内容を質的に分析し、肺病の地域療養支援ならびに卒煙に向けた支援への示唆を得ることを目的とした。

3) 研究 (2020 年)

都市部地域における COPD・結核等肺病予防のための卒煙プログラムの開発への示唆を得るため、喫煙者における喫煙及び生活、心理、身体機能等の実態を定量調査により把握し、卒煙にむけた要因を検討することを目的とした。

4) 研究 (2020 年)

都市部大規模住宅団地における「まちの保健室」において、予備卒煙プログラム:「卒煙友の会」を立ち上げ、喫煙者及び喫煙者の近親者等に対し卒煙及び肺の健康に関する普及啓発を行い喫煙者の卒煙をめざすとともに、プログラム参加者でのグループディスカッションにより卒煙に必要な要因を検討し、卒煙プログラムへの示唆を得ることを目的とした。

5) 研究 (2021 年)

国内外における卒煙プログラムにおける介入内容、プログラムアウトカム、評価方法を系統的に整理するため先行研究からの文献検討を行い、卒煙にむけたグループプログラム開発への示唆を得ることを目的とした。

6) 研究 (2022 年)

日本の習慣的喫煙者における喫煙の開始から習慣化ならびに現在までの経験、自身の経験を踏まえた禁煙にむけたニーズを in-depth interview により記述し、卒煙プログラム開発への示唆を得ることを目的とした。

7) 研究 (2023 年)

調査日から過去 3 年以内断煙を試みた経験のある者に定量・定性質問からなる Web 調査を実施し、禁煙施行者における喫煙時の実態、禁煙経験の実態、卒煙に向けたニーズを把握し、卒煙プログラム開発への示唆を得ることを目的とした。

3. 研究の方法

1) 研究

認定看護師(呼吸器疾患看護)5 人を対象に半構造化面接による質的記述的研究を実施し、インタビューにより語られた内容を逐語録に起こし質的記述的に分析した。

2) 研究

日本の 4 大都市にある 32 の保健所の協力を得て、日本版 DOTS 受療下の結核療養者に定量的かつ定性的調査を実施し、自由記載による定量調査回答内容を質的に分析した。

3) 研究

都市部地域における習慣的喫煙経験のある成人を対象に、定量的調査(無記名自記式質問紙調査及び肺・身体機能測定調査)、定性的調査(半構造化面接)を実施した。定量的調査の内容は、現在も喫煙する者と卒煙した者における各項目を比較した。定性的調査の内容は質的にカテゴリ化した。また定量及び定性的分析により得られた結果について、PRECEDE-PROCEED Model (Green, 2005) の枠組を基に準備要因、強化要因、実現要因へも分類し検討した。

4) 研究

都市部地域における住宅団地を対象に、Community Based Participatory Research により民産官学連携体制の「まちの保健室」を開発し、その一環として卒煙プログラム「卒煙友の会」を立ち上げ継続的に会を運営した。参加対象は喫煙者及び喫煙者の近親者、地域における卒煙に関心のある者であり、月 1 回のミニレクチャー及びディスカッション、スパイロメータを用いた肺年齢測定等により実施した。プログラム評価として、個別インタビュー、参加観察、フォーカスグループディスカッション、活動記録閲覧を行い、データを質的に分析した。

5) 研究

国内外における卒煙プログラムにおける介入内容、プログラムアウトカム、評価方法を系統的に整理するため文献検討を行い、データベースより 61 文献の Clinical Trial、Randomized Controlled Trial を検索し、本目的に合致する介入研究 32 編を選定した。分析は PRECEDE-PROCEED Model (Green, 2005) の枠組を基に質的に分析した。

6) 研究

習慣的喫煙者 16 名の協力を得て、55~90 分の in-depth インタビューを行った。インタビューの内容は、人口統計学的特徴、喫煙開始から現在までの喫煙経験、禁煙を試みたかどうか、それに関連する経験、喫煙に対する考えであった。インタビューは逐語録を作成し質的に分析した。

7) 研究

調査日から過去 3 年間以内に断煙を試みた経験のある者に Web 調査を実施し、禁煙施行者における喫煙時の実態、禁煙経験の実態、卒煙に向けたニーズについて、定量・定性質問により訪ねた。分析は断煙期間が 6 か月以上持続した場合を断煙成功と定義し、成功群と再発群の概要を記述し、断煙成否に関連する要因を検討した。

4. 研究成果

1) 研究

研究協力者により語られた 9 事例のうち 7 事例が男性であり、COPD 診断時の年齢は 72.6 ± 15.5 (33~85) 歳であった。COPD 療養者が療養生活を継続していくためのニーズとして【自分ではどうにもできない依存】、【わかりにくい障害を受け入れる葛藤】、【病とともに生きていく覚悟】、【療養を続けるための資源の調整】のカテゴリが見出された。COPD 療養者が療養生活を継続していくためのニーズを踏まえた支援として、身体的精神的苦痛への理解、療養者及び家族を支える地域関係資源による継続的包括的なサポート体制の必要性が示唆された。

2) 研究

地域における長期的な呼吸器疾患療養者への療養支援(日本版 DOTS)の阻害内容として“Non-acceptance,” “Frustration,” “Anxiety”が、促進内容として“Fear,” “Acquiring a partner,” “Relief,” “Belief”が、支援のアウトカムとして“Life changes” “Rebuilding oneself”が抽出された。療養支援を構成する要素により、療養者の治療的側面だけでなく生活の回復と心理的成長がもたらされることが記述され、対象とのパートナーシップを重視する要素を卒煙プログラムに組み込む重要性が示唆された。

3) 研究

調査回答者 39 人は 52.3 ± 13.8 (22-76) 歳、男性 34 人 (87.2%) であり、喫煙者 18 人、卒煙者 21 人であった。卒煙者は喫煙者に比較し 1 秒量が高く、循環器疾患を有する者が多く、生活習慣における朝食の欠食者が少なく、毎日飲酒する者が多かった (各々 $p < 0.05$)。定性的調査の対象者 4 人は 70.7 ± 6.4 (66-78) 歳、すべて卒煙男性であった。卒煙に至った経験として、心理的余裕、身体症状の悪化、健康に対する価値観の変化、周囲のサポート、喫煙代替行為等が語られた。卒煙に向けた介入として、喫煙のみに限定せず健康・生活全般に着眼するとともに、当事者の家族や所属する組織も含めて検討する必要性が示唆された。

4) 研究

研究 ~ を踏まえ、予備的卒煙プログラム:「卒煙友の会」を 2019 年 4 月~2020 年 10 月報告時点までに 22 回実施し、各回 22-76 歳の対象者が 1-28 (中央値 3) 人うち男性 1-23 人、のべ 110 人が参加した。地域における本プログラム、すなわち卒煙継続のニーズとして、【たばこへの依存に気づかされる落ち着いた時間】、【自身や家族の健康と生活の振り返り】、【地域社会における喫煙に対する許容意識への気づき】、【身近な仲間からの受け入れ】、【たばこに替わる楽しみへのアクセス】のカテゴリが抽出された。個人への支援として、不安の軽減や知識の付与とともに生活での実践的な方法の情報提供、集団への支援として、活動のきっかけ及び仲間づくりとともに集団グループとして成長できる働きかけ、地域への支援として、誰もが受け入れ合える社会規範を醸成するとともに多様化した社会健康問題への意識を高め合える視点が重要であることが示唆された。

5) 研究

文献 32 件の検討により PRECEDE-PROCEED Model における「健康」として、心身状態、ニコチン依存状態、「行動要因」として喫煙期間・量、過去の断煙試行状況、飲酒状況、行動変容段階等、「環境要因」として受動喫煙状況、ソーシャルサポート状況等が抽出され、選定文献におけるグループ機能を用いた介入内容より「準備要因」として喫煙の意味・リスクの理解、卒煙の理由・利点・実践方法の学習、禁断症状及び不当な誘惑への対処法の学習、ストレス・感情のコントロール等、「強化要因」として専門職等の受容的理解、ピア間の喫煙・断煙経験の共有、自己開示による自身の理解及び目標像の設定、ピア間の信頼関係、社会資源の活用等、「実現要因」として卒煙計画の検討、卒煙日の設定、卒煙試行時のフィードバック等が抽出された。卒煙プログラムの内容として、関連知識とともにピアグループによる卒煙計画の検討や試行時の経験共有等の重要性、身体面だけでなく心理的依存にも着目した検討の必要性が示唆された。

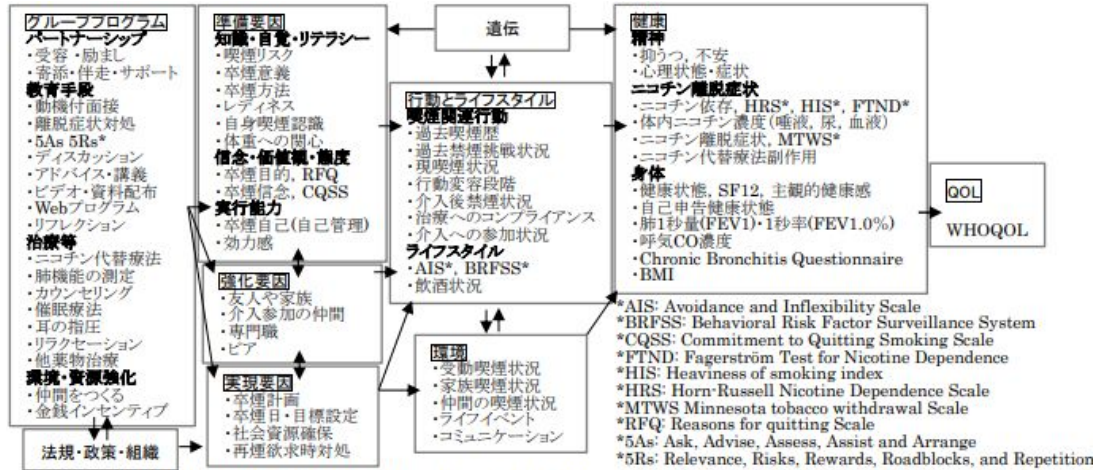


図1 PRECEDE-PROCEED Modelを活用した断煙グループプログラムの要素：文献検討
(白谷, 他: 日本地域看護学会第24回学術集会, 2021)

6) 研究

インタビュー協力者の年齢は 26 ~ 59 歳 (40.8 ± 8.9 歳) で、男性 10 名、女性 6 名であった。参加者は 13 歳から 24 歳の間に喫煙を開始し、喫煙本数は 1 日 10 本から 80 本で、12 人が禁煙を試みたが成功しなかった。禁煙開始から現在までの喫煙経験として “expand one's world,” “unconscious attachment,” “attempts and failures,” “losing oneself” が、卒煙に向けたニーズとして “empowerment from experts,” “peer interaction,” “social commitment,” “recovery of confidence” の 4 テーマが抽出された。習慣的喫煙者の視点に立った禁煙支援には、従来のアプローチによる改善に加えて、複数の短期目標とともに、対象背景に応じたピアグループでの継続的な活動や肺機能の視覚的評価を取り入れた専門家による支援による自信の回復が重要である。また活動を通じて地域社会での意識啓発も必要であることが示唆された。

7) 研究

調査回答者は男性成功群 126 人 47.8 ± 8.3 (24 ~ 59) 歳、男性再発群 138 人 45.6 ± 9.0 (26 ~ 59) 歳、女性成功群 37 人 43.9 ± 9.1 (28 ~ 58) 歳、女性再発群 31 人 39.9 ± 9.5 (26 ~ 57) 歳であった。男性成功群は再発群よりも孤独感得点が高い傾向、ソーシャルサポート総点が高い傾向、友人からのソーシャルサポート点が高い傾向があった。男性再発群は成功群よりもニコチン依存度が高く、TDS ニコチン依存度カットオフ値以上の者が多く、受動喫煙頻度が高い者が多かった。女性再発群は成功群よりも機会飲酒 2 合以上の者が多かった。断煙試行において困難だった内容は「なし」を除き、全群において「禁断症状」が最も多かった。次いで、男性成功群では「抑制の維持」「手持無沙汰」「周囲の環境」、男性再発群は「ストレス解消」「心の不安定」「仲間との付き合い」、女性成功群は「気分転換」「近親者の反応」、女性再発群は「日常の乱れ」「心の不安定」等であった。断煙を試みる者への卒煙プログラム内容として、受動喫煙を回避する方法の啓発が必要である。また特に男性へは友人からの働きかけとともに断煙をめざす仲間づくりに関する気づきを促す働きかけが重要であることが示唆された。

5. 総括

本研究の目的は喫煙者への COPD・結核等肺病疾患予防及び重症化予防のためのグループ卒煙プログラム「卒煙友の会」を開発することであり、プログラムに必要な要素を研究 ~ により検討し、研究 ~ により試行した。しかしながら COVID-19 及び実施地域における台風被害(大規模地域床上浸水)を受け、集合型開催がオンライン開催に移行した。当該グループだけでなく社会全体として、対面集合に対する考え方や行動変容、求める知識のニーズに変化が生じてきており、研究 ~ により改めてプログラムに必要な卒煙に向けたニーズ、支援内容を確定した。

今後はプログラムを本格実施し、介入研究により効果を多面的に評価しプログラムを検証のうへ社会へ普及する必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 横山歩香, 田高悦子, 白谷佳恵, 伊藤絵梨子, 有本梓.	4. 巻 23
2. 論文標題 特定保健指導非該当者である壮年期男性事務職の健診におけるヘルスリテラシーの様相	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本地域看護学会誌	6. 最初と最後の頁 23-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20746/jachn.23.1_23	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 白谷佳恵, 伊藤絵梨子, 有本梓, 小野田真由美, 田高悦子.	4. 巻 14
2. 論文標題 都市部住宅団地高齢者の生活時間・空間・行動及び地域との関わり合いに関する記述的研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 横浜看護学雑誌	6. 最初と最後の頁 9-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 白谷佳恵, 伊藤絵梨子, 有本梓, 小野田真由美, 田高悦子.	4. 巻 14
2. 論文標題 都市部高齢住宅団地における地域づくりにむけた理論構築: Community Based Participatory Researchによる民産官学共創「まちの保健室」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 横浜看護学雑誌	6. 最初と最後の頁 27-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 嶋津多恵子, 白谷佳恵.	4. 巻 77
2. 論文標題 保健師活動の現場を変えるEBPH第4回 活用事例 妊婦の喫煙防止対策 両親学級で、たばこの害についての講話は効果的?	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 保健師ジャーナル	6. 最初と最後の頁 342-345
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kae Shiratani	4. 巻 1642
2. 論文標題 Psychological changes and associated factors among patients with tuberculosis who received directly observed treatment short-course in metropolitan areas of Japan: quantitative and qualitative perspectives.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 BMC Public Health	6. 最初と最後の頁 8001-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1186/s12889-019-8001-9	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 白谷佳恵、田高悦子	4. 巻 12
2. 論文標題 COPD療養者が地域において療養生活を継続していくためのニーズ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 横浜看護学雑誌	6. 最初と最後の頁 28-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15015/00001581	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kae Shiratani, Junko Shimasawa, Mayumi Mizutani	4. 巻 25
2. 論文標題 Experiences with smoking habits and the need for cessation among habitual smokers in Japan: a qualitative study based on semi-structured interviews	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 BMC Primary Care	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1186/s12875-023-02254-8	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 白谷佳恵, 嶋澤順子, 水谷真由美
2. 発表標題 喫煙の習慣化に至る経験及び卒煙に向けたニーズ ~ 習慣的喫煙者への半構造化面接による質的記述的研究 ~
3. 学会等名 日本地域看護学会第25回学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 白谷佳恵, 有本梓
2. 発表標題 習慣的喫煙者における卒煙に向けたグループプログラムの開発: PRECEDE-PROCEED Model を活用した文献検討.
3. 学会等名 日本地域看護学会第24回学術集会, オンライン開催, 2021年9月.
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 白谷佳恵, 田高悦子, 有本梓, 伊藤絵梨子, 小野田真由美
2. 発表標題 都市部地域の習慣的喫煙経験者における卒煙にむけた要因の検討; PRECEDE-PROCEEDモデルを用いた検討
3. 学会等名 日本地域看護学会第23回学術集会, オンライン.
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 畠山佑, 白谷佳恵, 田高悦子, 有本梓, 伊藤絵梨子.
2. 発表標題 労働者における喫煙習慣による類型化と関連要因の検討.
3. 学会等名 日本地域看護学会第23回学術集会, オンライン.
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鹿川茜, 田高悦子, 白谷佳恵, 伊藤絵梨子, 有本梓.
2. 発表標題 30歳代男性労働者の健康づくりに向けた健康観における質的記述的研究
3. 学会等名 日本地域看護学会第23回学術集会, オンライン.
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 井上彩乃, 田高悦子, 有本梓, 白谷佳恵, 伊藤絵梨子
2. 発表標題 都市部の地域在住生活困窮高齢者における健康観と生活特性に関する質的記述的研究
3. 学会等名 日本地域看護学会第23回学術集会, オンライン.
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 白谷佳恵, 嶋澤順子, 水谷真由美
2. 発表標題 習慣的喫煙者における断煙成否の関連要因の検討 ~ 無記名自己回答アンケートによる横断調査 ~
3. 学会等名 日本地域看護学会第27回学術集会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 森礼子, 白谷佳恵
2. 発表標題 ベトナム出生結核患者への地域DOTSにおける治療中断リスクアセスメント項目-文献検討及び専門家インタビューによる検討
3. 学会等名 第12回日本公衆衛生看護学会学術集会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------